



私が幼児教育を志した頃(12)

津守 真

米国留学中、私はミネアポリスの家庭に一月ずつ泊めて頂くことになった。次の家庭に移るときには、いつも互いに別れ難い思いが残った。クラウンス家を去るときには、ミセス・ストロウブリッジは風邪を引いていて、明日から私がいなくなると言って悲しかった。一九五二年一月十三日午後、私はクラウンス夫人に連れられて、次の一月をすごすことになったW家に行った。クラウンス夫人は朝からそわそわしていたが、出がけに私を抱擁して、「おばさん」という呼び名を決して他の人に使ってはいけないと私に言った。

ミネアポリスの旧家―W家

W家は、大きなデパートや銀行の立ち並んだ市の中心部の小高い丘の上にあった。四十



年ほど前までは裕福な家の並ぶ閑静な住宅地だったが、いまは繁華街の大通りから一筋奥にはいったところで、その近隣十数軒だけがわずかに喧騒を逃れていた。W家は三階建ての煉瓦造りの大きな家で、ベッドルームだけで十以上あり、私は二階の一室を与えられた。息子と三人の娘は東部の大学に行っていて、末娘の五歳のグレイシーだけが両親と共に住んでいた。隣室には、ミセス・コクリンという長年ナースリースクールの先生をしていて退職した老夫人がいた。それからミセス・フリーマンという、W夫妻の結婚以来この家に住んでいるメードさんがいた。スエーデンの人で、いまは金曜から日曜までの三日間は自分のアパートに帰る。その他に週二日間洗濯掃除に来るお手伝いさんがいた。こういうわけで、私は皿洗いも掃除もする必要がなく、ちょうど大学も忙しくなったところで、勉強に専念できた。また、ビルグリムファウンデーションという、大学キャンパス内のクリスチャン学生のクラブでいつも昼食を食べていたが、そこでの若い学生たちとの付き合いも結構忙しくなっていた。

W家の毎日は極めて静かだった。W氏は殆ど書齋で過ごしていた。W氏は静かで、影のように家の中を歩く。応接間、書齋、それから三階の部屋には、祖父母時代よりの書物がところ狭きまでに天井までぎっしりとつまり、東西洋の古い陶磁器、人形、絵画等が家中至るところに置いてあった。W氏の母親が東洋の書画骨董の蒐集家だったとのことである。W氏はアメリカでも有名な工科大学の出身なのに、彼の読書は、シェークスピア、チョーサーから、ラテン語の史書、比較言語学、仏典の翻訳など幅広い。私がこの家に来

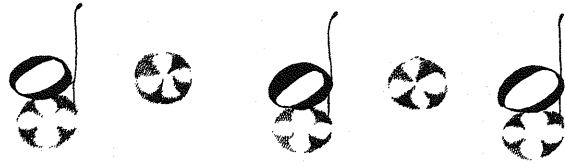


て間もなく、私はW氏の書齋に呼ばれ、徳川家康の肖像画の軸を見せられて、日本語で書かれた賛を読むように言われて驚いた。

W氏は月に数回、ミネソタ州北部にある水力発電の会社に行く。W氏の祖父は一八五〇年頃、アメリカ東海岸よりこの地方の地質調査団の一員として移住してきた。この大きな家を建てたのが一八七〇年頃という。

こういう格式のある家なのに、日常生活は質素で、ほとんど人も来ない。W氏はユニテリアン派の教会に属しているが、教会には殆ど行かない。夫人もまた静かな人である。夫人は週に一度、ミネソタ大学の「小説の書き方」という講義に通い、自室でタイプライターに向かう時間も多かった。末娘のグレーシーを週一度ミュージアムで開いているパレー教室に、日曜は教会の日曜学校に連れて行く。夫人は週に一度は音楽会やお芝居にゆき、しばしば私を連れて行ってくれた。

アメリカ人の家では、朝起きると、奥さんがガウンのまま朝食を準備し、台所で食事をするのが普通であるが、W家では朝食にもきちんとスーツを着て食堂で食卓につく。夕食時にはミセス・フリーマンが鐘を鳴らすと、W氏夫妻とグレーシーと私と、皆上着を着て食堂に行く。椅子につくとミセス・フリーマンがいつもきまった物腰で給仕をする。おそらく彼女がW家に仕えて以来四十年間同じようにこうしてきたのだろう。食事が済むと応接間で皆で雑談をする。週に三日ミセス・フリーマンのいないときにはW氏夫人が食事を作り、皿を洗い、W氏が皿を拭く。格式のある旧家の主人でもこの点では平民的である。



近所の人が通りがかりに立ち寄って話しこむということはない。客を招待するときには、主人夫妻は威儀を正して玄関で迎える。食卓の給仕はミセス・フリーマンではなく、正式の給仕人が雇われる。

こういう旧家はもはやミネアポリス市に多くはない。私を泊めて下さった家庭の中で、旧家はここだけだった。旧家といわれた家も若い人の代になると古いものを捨て去って出て行く。あるとき、W氏自身が話してくれたのだが、父親が死んだとき、兄弟はだれもこの古い家を欲しがらなかった。古風な煉瓦作りの薄暗い大きな建物、役に立たない無数の書籍、古い品々、それよりも便利で使いやすい近代的な家具と機械の方が若い人々には魅力的だったのだそうである。W氏はたまたま静かな古い生活を愛したのでこの家を受け継いだ。子どもたちはだれもこんなものを欲しがらないだろうと笑っていた。

ミネアポリスでは富裕人たちは、子どもたちを東部の大学、高等学校に出す。W家でも子どもたちがクリスマスと夏休みには東部から帰ってくる。そうすると普通のアメリカの若い人たちと少しも変わらない。床に寝転がって本を読み、母親から注意される。

五歳の娘

夕食後は、居間のソファで、五歳の娘のグレーシーと、私が日本から持ってきたキンダーブックを読むのが日課だった。それは私共にとつて楽しい時間だった。

グレーシーは母親を愛し、母親も彼女を愛していた。ある晩、母親が、グレーシーが遊



んでいる間にこっそりと音楽会に行った。しばらくしてグレイシーは母親がいなのに気がつき、泣いて家中を捜し回った。私はそれからどうなるかを興味をもって、グレイシーのそばに行きたいのを我慢して見ていた。父親は書斎から出て来なかった。マミー、マミーと家中を歩き回るグレイシーの声が開いてきた。と思ったら、驚いたことに、グレイシーは新しい折り紙とはさみを手にもって私の部屋に来て、私のそばに座っていた。母親が帰るまで彼女は私の傍らで遊んでいた。

W家の脇は斜面になっていて、橇で雪滑りをするのに最適だった、土曜日にはグレイシーも幼稚園がなく、私も大学の授業のないときは、雪滑りのスリルを楽しんだ。時には近所の子も加わり、私も子ども時代に戻ったような気になった。土曜の午後のW家は、あの音ひとつしない静けさで、私はしばしばもの寂しに襲われた。ある土曜の午後、私は久し振りに倉橋惣三『幼稚園雑草』を開いて、とても日本が懐しくなった。子どもに対するあの柔らかい空気はここでは得られないものだ。ここの児童心理学は専門的になりすぎて心がかさかさになる。学問的にはいい仕事でも、うるおいがいい。全く忙しい。「我は己自身を子どもに与えん。教育は己自身を与えることである」というフレーベルの言葉は、ここでは理解されないように思った。それは異国の生活の緊張感からくる私自身の異常心理だったかもしれないが、その後の学問の進展をみると、子どもの学問は、ひとりひとりの人間の心の真実に立ち戻って考えることを忘れてはならないとその時に考えたのは間違っていないかったと、いまになって思う。

人間はどこでも同じ

この年は特別に雪がひどかった。吹雪の夜だった、ビルグリムファウンデーションでの会合が遅くなり、W家の前まで急ぎ足で帰って来ると、よろよろと前を歩いていく人がいた。近づいたら、女の人だった。追いつそうとすると、急に私の足元に倒れてきた。昨日からのすごい吹雪で、歩道には人の歩いた道が一尺ぐらいの幅で付いているが、両側は膝より上まで雪が積もっている。今ここで倒れたら凍死してしまうだろう。私は抱き起こすと、三十歳ぐらいの瘦せた女性で、まるで幽霊のように見えた。やっと抱き起こしてどこまで行くのか聞きながら、歩いた。酒のにおいがぶんと臭った。酔っ払いとこんなに夜遅くまでかかわりあうのは嫌だから、よほど家に入ろうかと思つたが、こんな雪の中に倒れていたら本当に死んでしまう。とたんに考えた。私もここでアメリカ人の世話になつているのだから、いずれにせよ、この人をうちまで送つていかなくはない。たとえ酔っ払いであろうとも、同じ人間だ。ほっといはいけないと思つた。決心して、倒れそうになるのをかかえながら歩いた。何を聞いてもただでさえ分からない英語が、酔っ払いの英語だから一層わからない。分かつたことは、その人の家まで遠くないということ、送つて来てくれるということだった。途中で、その人が持つている紙袋の底が抜けて何か雪のなかに落ちた。一生懸命暗闇を探して見つけたら、何と胸に抱えるぐらいの大きなウイスキーの瓶と、もうひとつウイスキーの小瓶だった。私は片方の腕にそれをかかえ、もう一方の腕で倒れそうな女の人をかかえて、吹雪の中でそれは大変だった。途中で彼女



は何度も雪のなかにひっくり返ってしまふ。母にはお酒のことを隠しているんだからうちに帰っても言うなと言つた。うちであなたが母に会つたら、きつとびっくりするだろう。

それはこわいんだからと言ふ。何度も母に言つてくれるなと嘆願するので、そんなこと言わないから安心しなさい、しかし、何でこんなに酔つぱらうほど酒を飲むんだとお説教しながら十ブロックほど歩いた。暗闇の雪の中で心細かつたが、次第にこの人がかわいそうになつた。良く考えれば、この人も私も神様の目から見れば大差はない人間である。見下してはならない。ようやくその人の家にたどり着いてドアのなかに送り込んだ。一緒に入ってくれと言つたが、もう私の役目は済んだと思つて後も見ずにW家に帰つてきた。

当時は東京の町には酔つ払いは多かつた。清潔なので有名な米国のミッドウエストの町、ミネアポリスで女性の酔つ払いに会うとは思つてもいなかった。占領下の日本では米国人というと軍人か特別な人しか知らなかつた私は、どこの国にもいろいろの人がおり、だれでも同じ人間だということを、あらためて知らされた。

文章を書く人

W家の生活は、家が広いこともあり、互いに顔を会わせることも少なく、干渉がなさすぎるくらいだつた。ことに後半二週間は、W氏夫妻は東部に行つて留守で、私は全く気楽に過ごした。そして二月二十四日、夫妻の留守の間に次の家庭ホワイト家に引越した。

W氏夫妻は、それから五年後の一九五七年秋に客船「プレジデント・クリーヴランド」



号で日本に來られ一月程日本各地を旅行された。私は大学の仕事に忙しいときで、思うほどに案内できなかつたことをいまになつて残念に思つてゐる。W氏は、帰国してすぐに『一旅行者の見た日本』と題して四十ページの小冊子を自費出版された。鎌倉、日光からはじまり、関西、九州、阿蘇、島原と、旅で見聞きされたことを、宿屋や料理にいたるまで具体的、詳細に記されている。その最後に、「一般論には眞実はない」というヴォールテールの言葉を引用しながら、日本の自然、文化、人についての一般的感觉を記し、「日本人は自発性があり、勤勉で、十年から三十年の間に一大工業国になるだろう。私は日本が物質的、芸術的、精神的に世界に大きな寄与をすることを、そして西欧はそれを認めるにやぶさかでないだろうと信じてゐる。」と結んでゐる。W氏の旅行記を読んで、私は、W氏の静かな書齋を思い起こした。

米国人は、しゃべるのが好きな人が多い。ある人はしゃべるように気楽に手紙を書いてくれる。W氏のように、文章で表現する人は少ない。私が滞在していたとき、あの家の中の静けさに多くの思いが籠められていたことを私はW氏の旅行記を再読して思つた。W氏はその後数年で亡くなつた。夫人は東部に移住されていまでも健在である。グレーシーは菜食主義者で、母親と一緒に住み、飛行機のパイロットである。

ミネアポリス市の中心部にあつたW氏の大きな家も、氷滑りをした丘の斜面も、いまは再開発されて繁華街になり、その位置を確かめることも困難である。